

西水 美恵子

にしみず・みえこ＝75年ジョンス・ホプキンス大学院卒、プリンストン大経済学助教授を経て、世銀副総裁。退任後、シンクタンク・ソフィアバンクのパートナーなどを務める。



「女が大事にされるのは雛祭りくらいなもんやさかい」。いつ誰に言われたのか忘れたが、子供

供心にとキツとした記憶が残る。それ以来、ぼんぼりの灯りにわくわくした嬉しさは、消え去った。高校時代に縁あって米国へ。留学というと聞こえがいいが、実は家出同然の親不孝者だ。教育は男女平等なのにその後の差別に納得できなくて、日本脱出の安易な道を選んだ。学生時代はもちろんのこと、実力主義が徹底していた教職に就いてからも、女だからと差別されることはなかった。米国人種差別はあっても、女性差別はないと思いついてきた。様々な女性解放運動を先導する人々の動機を疑い、

ウエーブ 時評

2010. 3. 3

忘れもしない雛祭り

草の根活動を続ける女性たちの苦勞を思いやることさえなかった。罰があたった。思いもよらぬところで差別の壁に出会った。世界銀行の誘いを受けて示唆された年俸が、当時経済学部助教授だったプリンストン大学の給料を下回っていた。最低限、実質給与を同額にと交渉したら、人事の担当官が言った。「なぜ給料にこだわるのだ。旦那は働いているのだらう」。頭にきた。「私が男だったらどう言うの」と反問したら仰天したらしく、喧嘩にもならなかった。日本に比べれば、世銀は天国だった。しかし、当時は他の欧米組織と違わず、俗に言う「ガラスの天井」はもちろんのこと、女性のキャリアや発展を妨げる大小様々な差別や障害があった。初めて局長職に就いた時、職員組合から女性問題委員会の議長になってくれと頼まれ、喜んで受け取った。おかげで、それまでは殆ど気が付かなかった悪質な無意識差別やセクハラ問題が意外に多い現状を知って、驚いた。「現実はいどいのに経営陣は聞く耳さえ持たない」と憤る組合幹部。もっともだり。女性職員の悩みに共感など湧かないのが普通だらう。その共感を発生させることから始めなければと、皆で作戦を練った。まず、世銀COOとCFOの双方を兼ねた取締役に就くS氏に焦点をあてた。総裁を凌ぐと言われるほど力を持つ人だったが、筆頭理由は、彼がユダヤ系米国人で、ゆえに人種差別をとことん嫌う人だ。格者だったからだ。人種でも性別でも差別は同じ。彼なら可能性が高いと睨んだ。当時、世銀の女性管理職員は5人だった。皆と相談して、彼を昼食会に招いた。その日、女勢揃いで待ちうける部屋のドアを開け「遅れてすまん！」と笑いながら1歩踏み入ったS氏。あまりにも少ない頭数にギョツとしたのだらう。入り口にきづけけになり、笑いが顔に凍りついた。同僚の一人がこころ笑って言った。「今こそ解ったでしょう！どこへ行っても紅一点の私たちが、毎日どんな気持ちで仕事しているのか！」S氏は、私たちが次から次へと語る差別の現状に、心底怒った。なぜ今まで気付かなかったのかと恥じ、涙さえ流した。S氏の頭とハートが、すっかり繋がった。昼食を終える頃には「女性問題解消へのチャンピオン(擁護者)になろう」とまで申し出てくれた。礼を言う私に、S氏が言った。「男が作った組織文化を変える仕事だ。大変だらうが、いつか必ずミエコの国でも起こることを。予行演習と思って楽しめばいい！」ぼんぼりの灯りが、臉の裏でゆらりと揺れたような気がした。忘れもしない1992年3月3日、雛祭りの日のことだった。